

巻頭言

土木遺産が切り開く新たな地平

阿部 貴弘



蛇口をひねれば、水が出る。そんな“あたり前”の日常が、あたり前ではなかった時代がある。井戸や河川から水をくみ、生活用水として大事に使っていた時代は、実はそれほど昔のことではないはずであるが、我々が水道の蛇口をひねるとき、そうしたかつての暮らしに思いを馳せ、現在の豊かさを改めて意識することはまずない。それこそが、我々が享受しているあたり前の日常である。

こうしたあたり前の日常を創り出し、支え続けてきたのが土木施設である。それらの土木施設には、各時代の社会の要請に応えるため、あるいは地域の発展のため、そして何よりも人々の暮らしの質を高めるために力を尽くしてきた、先人の知恵や工夫が凝縮されている。「土木遺産」とは、まさにそうした先人が我々に残してくれた大切な財産なのである。

世界遺産がいわばブームとなっているいま、「土木遺産」という言葉もそれほど違和感なく一般に受け入れられているように思う。しかし、そうした土木遺産に関わる取組みの歴史は比較的新しい。たとえば、公益社団法人土木学会による総合的な土木遺産の調査が開始されたのは、1990年代に入ってからである。また、同じく土木学会による土木遺産の顕彰制度として「選奨土木遺産制度」が創設されたのは、2000（平成12）年のことである。一方、文化財保護法に基づく「国宝及び重要文化財指定基準」が改正され、「土木構造物」が文化財の範疇に位置付けられたのは、1996（平成8）年のことである。つまり、土木遺産に関わる本格的な取組みの歴史は20年ほどしかなく、いまだ発展途上の新しい分野であると言えよう。

少しややこしいが、“土木遺産の新しさ”について、いくつか論点を示しておこう。

まず、土木遺産の価値付けである。土木遺産にどのような価値を見出し、その保全にいかなる意義を認め

るのか、土木遺産の“価値付け”はいまだ試行錯誤の段階にあり、専門家の間でも議論が続けられている。これまでの土木遺産は、“我が国初の〇〇”、“明治期最大規模の〇〇”、“現存最古の〇〇”といった、いわば希少価値に重点を置く狭義の文化財的な視点から価値付けがなされ、これに基づきいわゆる“逸品”の土木遺産が評価され、保全措置が講じられてきた。しかし、そうした逸品の土木遺産は、専門家や好事家はともかく、一般の市民にとっては日常生活とは切り離された遠い存在であり、その価値が広く理解されてきたとは言いがたい。

ところが近年は、価値付けの議論が広がりを見せ、“なぜその施設が必要とされたのか”、“その施設ができたことで、社会や人々の暮らしがどのように変わったのか”といった、社会的・文化的な価値の読み解きが重視されるようになってきた。これに伴い、土木遺産の種類は多様化し、よりローカルで身近な土木施設が、土木遺産として価値付けられるようになってきた。土木施設という“モノ”に刻まれた歴史を多面的に読み解くことで、日々の暮らしを支える身近な土木施設にも光をあて、遺産としてその本質的な価値を見出そうとする試みである。こうした試みを通して、土木遺産が身近な存在として広く一般市民にも受け入れられ、さらにまちづくりの資源としても活用され始めている。

しかし残念ながら、現状ではそうした価値を読み解くことのできる専門家や技術者は、研究の分野においても、また実務の現場においても不足している。そのため、価値が顧みられることのないまま撤去されたり、価値に無配慮な改修がなされたりしてしまう土木遺産も少なくない。こうした人材不足を解消するためには、何より土木史教育が重要であることは言うまでもないが、それに加えて現場の技術者が、土木遺産という発展途上の分野を牽引しようという気概を持って、実務を通じた鍛錬を積み重ね、土木遺産に向き合う姿勢を

身につけることも重要である。土木施設に刻み込まれた歴史の痕跡を、糸をつむぐように丁寧に読み解いていく作業は、とても根気のいる仕事である。しかし、そうした無数の痕跡が、一本の糸としてつながった途端、一見どこにでもありそうな土木施設が、かけがえのない土木遺産に姿を変えるのである。ぜひ、この楽しみ、いや驚きを味わっていただきたい。

一方、土木遺産の保全技術も、今後の発展が期待される分野である。一度造った土木施設を長く使い続けるというのは、これからの建設分野における大命題であるが、土木遺産の保全はその最先端を担っているともみることができる。

土木遺産は、現行の技術基準が定められる以前に建設された施設が多く、つまり現行の技術基準を満たしていない施設が多くある一方で、現役稼働中の施設も少なくない。さらに、たとえばリベットなど、現在では使われなくなった技術を用いて建設された施設もある。加えて、まちづくりに活用するとすると、本来の用途とは異なる用途に転用されることもある。こうした施設において、土木遺産としての価値を減ずることなく、補修や補強を通して現役施設としての性能をいかに満たしていくべきか。土木遺産に向き合う技術者が、最も頭を悩ませる場面ではないだろうか。しかし見方を変えれば、ここに技術革新の好機、すなわちビジネスチャンスがあるのではないか。土木遺産を保全するためには、新たな施設を建設する場合とは異なる視点から、診断技術や補修・補強技術を開発する必要がある。そうした技術開発は、一般的な土木施設の長寿命化に資する先端技術に通ずる可能性があるのではないだろうか。

最後に、土木遺産にかかわる最新動向を紹介しておこう。これまでに価値付けされてきた土木遺産は、第二次世界大戦以前に建設された土木施設が中心であった。それが昨年から、土木学会土木史研究委員会において、戦後に建設された土木施設の歴史・文化的価値をいかに評価するかという議論がはじめられた。戦後、おもに高度成長期に建設された土木施設が更新の時期を迎えるなか、それらが失われる前に価値を評価しておこうという取り組みである。戦後の土木施設は、大量かつ現役稼働中の施設も多い。それらの価値をどのように評価し、補修・補強していくのか、新たな挑戦が始まっている。

宝探しではないが、少し視野を広げて見方を変えれば、普段見慣れた風景の中に、身近な土木遺産がきっと見つかるはずである。そうした土木遺産は、日々の暮らしの中で意識することのないあたり前の存在であるがゆえ、失われてはじめて、その価値に気づくこともある。残しておけばよかったと後悔しても、後の祭りである。同じ価値を備えた施設は、二度と創り出すことはできない。そうならないためにも、日ごろから身近な土木施設に対して、気配りや目配りをして、思いやりを持って接することが大切である。

先人の残してくれた土木遺産に向き合うとき、現在の我々の知恵と工夫で、はたしていかなる取組みを講ずるのか、「さあ、お手並み拝見」と先人に問われているように思う。そこで臆せず、横綱に胸を借りるつもりで飛び込んでみよう。その向こうに、きっと新たな地平が開けるはずである。

——あべ たかひろ 日本大学 理工学部 まちづくり工学科 准教授
(公益社団法人土木学会 選奨土木遺産選考委員会 幹事長) ——